## 抹茶フリーク〝十吉〟が行く！

# 「河越抹茶」ブランドの確立、そして…

埼玉県川越市―蔵の街、また「九里四里（栗より）うまい十三里」のさつま芋の特産地として知られるが、近年にわかに注目されているのが同市周辺で生産される抹茶「河越抹茶」（商標登録申請中）だ。

すでに市内の飲食店など約150店が「河越抹茶」を使用して商品化、川越の新たな特産物としてブランドの確立をめざしている。

その活動の中心にいるのが、布目雅人さんと林真太郎さんという2人の若者だ。

かつて武蔵河越（現在の川越市周辺）は天下の茶処として知られていたという。

銘茶「河越茶」にならい、平成に「河越抹茶」として蘇らせた彼らの取り組みを紹介する。

カラーは61ページ参照

**取材協力**

㈱十吉
（埼玉県川越市小仙波町4－16－8　☎049－270－7213）

NPO法人「河越抹茶の会」
（同上）

狭山碾茶工房　明日香
（埼玉県狭山市加佐志201　☎04－2959－1815）

▼河越抹茶パンフレット。黒の表紙は蔵造りの街をイメージしたもの

▶河越抹茶のリーフレット。観光案内所等においてもらっている

## 川越―河越茶―河越抹茶について

河越茶に関する記述は南北朝時代『異制庭訓往来』に初見され、茶の産地として「武蔵河越」が明記されている。

当時、茶産地形成の役割を担ったのが寺院であり、京都の栂尾、仁和寺、大和の室生寺、伊勢の河居寺、駿河の清見寺、武蔵河越の無量寿寺（現在の中院）が記されている。

中院には最澄の弟子であった円仁がこの寺を創設（830年）した際に京より茶を持ち帰り、境内で栽培したという説があり、その碑も現存している。

平安時代末期には現在の川越市上戸に館を構えた有力武将河越氏が茶を嗜み、以後栽培や製法が広まっていったと考えられる。

河越館跡からは石臼（抹茶を作る際に使われたとされている）、天目茶碗、茶壷、茶入れなどが出土している。

その後、戦国時代になって栽培していた寺院、武士が衰退するとともに茶産地も荒廃し、その名も消滅していった。

江戸時代中期になると、宇治の永谷宗円によって煎茶が作られるようになった。

人気を博した宇治茶は江戸にも運ばれるようになり、やがて江戸に近い狭山地域で河越茶が復興。

狭山丘陵から加治丘陵にまたがる茶の栽培に適した地域に急速に広まって、宇治茶に劣らぬ品質の茶の製法を確立し、生産が盛んになっていった。

出雲祝神社（入間市宮寺）には天保3年（1832年）に建立された「重闢茶場碑」が残されているが、「重闢」すなわち「重ねて開く」とは一度閉じた茶作りを再開することを意味している。

碑は「州の北、河越の野に狭山あり～」という一文から始まっており、戦国時代の混乱とともに衰退していった河越茶を狭山茶として復活させる経緯が記されているのである。

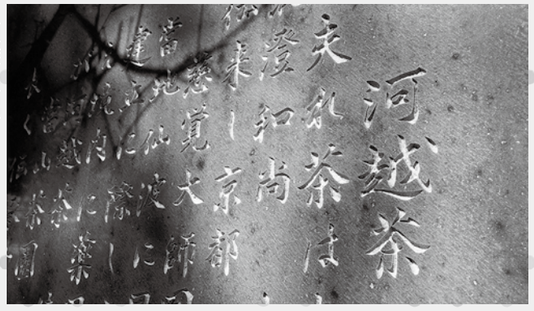
なお「河越抹茶」は埼玉県西部地区（川越、狭山、所沢など）を中心とした「旧河越領内茶園限定」とし、それらの茶園で丁寧に栽培された高品質の茶葉を厳選して作られたものと定義づけられている。

旧河越領とは、かつて河越（川越）と呼ばれたことがある領土や市域を指している。河越茶が全盛を誇った鎌倉時代や南北朝時代の河越は「河越荘（河越33郷）」と呼ばれ、鶴ケ島市、日高市などに領土が点在。

江戸時代後期には現在の狭山市、所沢市、上福岡市の一部などが「河越（川越）藩領」だったといわれている。

大正11年の市制施行時の市域は現在とは異なり、昭和30年に9ヵ村が合併し現在の川越になった。

NPO法人川越PLUS（後にNPO法人「河越抹茶の会」）を立ち上げ、こうした歴史を紐解いて河越茶を新たなブランド「河越抹茶」として現代に蘇らせたのが、後述する川越出身の抹茶フリークの2人、布目雅人さんと林真太郎さんである。




▶河越茶の石碑